

〈資料〉

障がいを持つ学生が実践できるキャンプ実習プログラムの成果と課題

片山 昭義* 中島 悠介*

要約

車椅子を利用する学生の入学を機に、本学で実施するキャンプ実習の会場及びプログラムの見直しを行なった。そして今夏実施に至り、次の成果を確認することができた。まず障がい学生への配慮事項を明示できたことである。具体的には①人的配慮、②空間的配慮、③プログラム参加の配慮である。そして参加した障がい学生は、困難な状況でも最後までやり抜く体験や自身の成長を実感できたことで高い満足度を得ることができた。一方課題も明らかになり、障がい学生が参加できないプログラムを入れざるを得なかったことや、参加学生との交流への配慮が不十分であり参加学生側の戸惑いを払拭しきれなかったことが挙げられる。

キーワード 障がい学生、キャンプ実習、障がい者スポーツ、野外活動、共生社会

目次

1. はじめに
2. 本実習の取り組み
 - (1) 概要
 - (2) スケジュールと実習内容
 - (3) 障がい学生への配慮
3. 方法
 - (1) 参加学生へのアンケート調査
 - (2) 障がい学生のコメント抽出
 - (3) 保護者へのアンケート調査
4. 結果と考察
 - (1) 参加学生からの評価
 - (2) 障がい学生からの評価
 - (3) 保護者からの評価
5. まとめ

1. はじめに

キャンプを行うことの意義は、自然体験、社会体験、生活体験、チャレンジ体験の4つの体験にあると言われている。^[1]これらの体験の必要性は、文部科学省中央教育審議会でも指摘されており、2013年1月に答申された「今後の青少年の体験活動の推進について」の中で、「社会を生き抜く力」の養成、規範意識や道徳心の育成、学力への好影響などの成果を上げていると報告している。^[2]

これらの成果は障がい者にとっても同様に必要である。いやむしろ障がいにより生活や行動の範囲が制限されている障がい者にこそ、積極的に提供されるべきであると考ええる。独立行政法人日本学生支援機構が実施した「2016（平成28）年度大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書」によると学外実習・フィールドワークにおいて肢体不自由の障がい学生に対する授業支援を行っている大学は76校（実施率20.2%）にとどまっており十分に行き届いているとは言い難い状況である。^[3]なおかつ障がい者に対するキャンププログラムの提供を報告した論文は数少なく、大学等の高等教育機関におけるキャンプ実習において障がい学生の参加を報告した例は皆無である。

このような状況の中、本学健康スポーツコースに車椅子を利用する障がい学生が入学することとなり、障がい学生自身がキャンプ実習等の活動に強い参加意欲を示していることから、筆者らは「障がいを持つ学生が実践できるキャンプ実習プログラムの試み」^[4]の中でキャンプ場の選定から、本学キャンプ実習（以下、「本実習」という）の特長を活かした障がい学生が参加する実習プログラムの作成を試みた。そして本年9月に同実習を実施することができたので、その取り組みを報告するとともに、実践で得た成果と課題をまとめ、今後の障がい学生への支援活動の一助としたい。

なお今回の報告については、障がい学生本人及び保護者の同意と内容の了承をもとに作成することを付記する。

2. 本実習の取り組み

（1）概要

①目的：

本学総合福祉学部2017SYLLABUSによると「まず、自分が自然での生活体験を学びながら、他方で、障害児（者）や高齢者に対する野外での生活援助技術技法を学ばせる。」^[5]とされており、キャンプの経験が無いもしくは経験が少ない学生に対してまずは自らがキャンプを経験し、その経験を踏まえて将来の援助対象者である高齢者や障がい児（者）に対する援助の手段となり得ることを理解するとともに、具体的な援助技術を習得することを目的としている。本実習において実習参加者は、まさに障がい学生と生活を共にしながらキャンプの意義を体感する機会になったものと考ええる。

②参加者及びグループ分け：

参加者は本学総合福祉学部及び短期大学部介護福祉科の1年生17名（男子12名、女子5名）であった。参加者を性別や学科別に配慮し3つの生活班に分け、野外炊飯やプログラムの活動グループとして活用した。宿泊については、男女別とし学科ごとの参加者の関係性を考慮して4グループに分けテント班とした。

③実習期間：2017年9月5日（火）～8日（金） 3泊4日

小・中・高校生の夏休みが終了した9月上旬の平日を実習期間として選択した。大学生はまだ夏期休業中であることと、他団体の利用が少なくなる時期でありキャンプ場の主たる施設を独占的に使用できるためこの期間で実施した。

④会場：国立赤城青少年交流の家 谷のキャンプ場

障がい学生が利用する施設として、生活面については居室や浴室、トイレがバリアフリーとなっている。またプログラム運営面については、キャンプ場の炊事場が比較的平坦な場所にあることやバスケットボールコート2面ほどの広い屋根付き広場があり、直射日光や雨を避けることができる。これらの施設が充実していることに加え、交流の家としても障がい者の受け入れを積極的に行っていることから、本会場で実施することとした。

(2) スケジュールと実習内容

本実習のスケジュールを表1「2017年度浦和大学キャンプ実習スケジュール」に示す。実施された内容としては以下のとおりである。

表1 2017年度 浦和大学キャンプ実習スケジュール

◆期間：2017年9月5日（火）～8日（金）

◆会場：国立赤城青少年交流の家

	1日目：9月5日（火）	2日目：9月6日（水）	3日目：9月7日（木）	4日目：9月8日（金）
7:00	9:00 JR東川口駅集合 →出発	7:00 朝食（キャンプ場）	7:00 朝のつどい 7:30 朝食（本館）	7:00 朝のつどい 7:30 朝食（本館）
8:00		9:00 季節を楽しむ プログラム ～アロマキャンドルづくり～ （担当：学生スタッフ）	9:00 あかぎアドベンチャー プログラム （担当：教員+外部講師）	8:30 キャンプ用具の 管理・清掃 ～撤収作業～
9:00				10:00 グループ別 ミーティング 【センター棟研修室】
10:00				11:00 閉講式
11:00	11:30 開講式・ オリエンテーション 【講堂】	11:30 食を楽しむ プログラム （担当：学生スタッフ）	【キャンプ場】	【本館：第2研修室】
12:00	12:00 昼食（本館）		12:00 昼食（本館）	

13:00	13:00 コミュニケーションゲーム (担当:教員)	～昼食含む～	12:30 水と親しむプログラム ～カッター体験～ (担当:外部講師)	12:30 昼食(本館)
14:00	【キャンプ場】			13:30 出発
15:00	14:30 テント設営法 (担当:学生スタッフ)	【キャンプ場】		
	【キャンプ場】	15:00 自然を楽しむ プログラム ～ネイチャーゲームの体験～ (担当:教員)		
16:00	16:00 野外炊飯 ～カレーライス～ (担当:学生スタッフ)	【キャンプ場】		16:00 JR東川口駅到着 →解散
		16:30 バーベキュー講座 (担当:教員)	【赤城少年自然の家】	
17:00			17:00 タベのつどい	
	～夕食含む～	17:30 野外炊飯 (キャンプ場) ～BBQ～ (担当:学生スタッフ)	17:30 夕食(本館)	
18:00		～夕食含む～		
19:00	【キャンプ場】	【キャンプ場】	19:00 キャンプファイヤー (担当:教員、学生スタッフ)	
20:00	20:00 ミーティング 【キャンプ場】	19:30 夜を楽しむ プログラム (担当:学生スタッフ)		
	20:30 自由時間・入浴(シャワー)	【キャンプ場】	【キャンプ場】	
21:00		21:00 自由時間・入浴(シャワー)	21:00 自由時間・入浴(シャワー)	
22:00	22:00 健康チェック・学生消灯 スタッフミーティング	22:00 健康チェック・学生消灯 スタッフミーティング	22:00 健康チェック・学生消灯 スタッフミーティング	
23:00				
23:30	23:30 全体消灯・最終見回り	23:30 全体消灯・最終見回り	23:30 全体消灯・最終見回り	

※朝のつどいとタベのつどいは会場の必須プログラム

※スケジュールは天候やプログラムの進行により変更することがある

※雨天プログラムは別途検討する

①コミュニケーションゲーム(所要時間:60分、担当:本学教員)

会場に到着し、開会式直後に行われた。参加者の緊張をほぐし、参加者同士または参加者と学生スタッフの交流を促すことをめざし実施され、これから始まる本実習への参加意欲を醸成することにもつながった。



図1 「コミュニケーションゲームの様子」

②テント設営法（所要時間：120分、担当：学生スタッフ）

本実習において参加者は常設テントに宿泊するが、野外活動の基礎知識を習得することを目的に仮設テントの設営法を行った。学生スタッフが設営の手順を示しながら実演し、参加者は生活班ごとにテント設営を実践した。参加者全員が初心者であったが、丁寧な説明により迷うことなく全員の協力によりテントを完成させることができた。



図2 「テント設営の様子」



図3 「完成したテントで記念撮影」

③野外炊飯～カレーライス～（所要時間：240分、担当：学生スタッフ）

生活班ごとに火起こしから炊飯及びカレー作りまで分担して実施した。それぞれの作業のレクチャーは学生スタッフが行ったが、なかなか火がつかなかったり、野菜がうまく切れなかったりとかなり苦戦しているようであった。しかし苦労しながらもメンバー全員で協力して作ったカレーライスはとても美味しかったようである。



図4 「野外炊飯の様子」

④ナイトウォーク（中止）

夜ならではの自然の姿を五感で感じてもらうためにプログラムを企画したが、野外炊飯が予定の時間を超過したため、無理に野外炊飯の片づけなどを急がせたりせず、プログラム自体を中止とした。なお短い時間ではあったが、野外炊飯に時間がかかってし

まったことを振り返るために班ごとのミーティングを行った。ミーティングでは「お互いに声をかけていなかった」「班の中で進捗を確認していなかった」「時間自体を気にしていなかった」など、今後展開される本実習の教育的意義の気付きにつながる意見が出され有意義な話し合いができたようである。



図5 「話し合いの様子」

⑤季節を楽しむプログラム～アロマキャンドルづくり～（所要時間：150分、担当：学生スタッフ）

雨天のため、当初予定されていた「あかぎアドベンチャープログラム」を翌日に延期し、急遽3日目に予定されていた本プログラムを実施した。各班に提示されたテーマに沿ってアクリル板にイラストを描き、完成後他の班にテーマを当ててもらうなどゲーム的な要素も含みつつ、楽しみながらキャンドルづくりが進められた。完成したキャンドルは、翌日のキャンプファイヤーで点灯されることが伝えられた。



図6 「アロマキャンドルづくりの様子」

⑥食を楽しむプログラム～ドラム缶ピザ&ポトフづくり～（所要時間：210分、担当：学生スタッフ）

本実習2回目の野外炊飯であった。前日のカレーづくりのように作るプロセスがイメージできず最初は苦戦していたようであったが、徐々にチームワークが発揮され手際よくピザとポトフ（野菜スープ）が完成した。班ごとに出来上がるタイミングが異なったので別々に食べ始めたが、とても充実した食のプログラムを体験できたようであった。



図7「手作りのピザ」



図8「ピザ&ポトフを楽しんでいる様子」

⑦自然を楽しむプログラム～ネイチャーゲームの体験～（所要時間：90分、担当：本学教員）

前のプログラムの予定時間が超過したため、時間を短縮しての実施となった。教員から「本来自然はリラックスして楽しむもの」というレクチャーを受けた後、課題である“班ごとに自然の中の宝石を探してくる”に取り組んだ。のんびりと周辺を散策しながら

ら課題に取り組む過程で、相互のコミュニケーションを楽しんだようであった。



図9 「自然の中の宝石」

⑧BBQ講座&野外炊飯～BBQ～（所要時間：210分、担当：本学教員）

バーベキュー検定の資格を持つ教員より、おいしいバーベキューの楽しみ方のレクチャーの後、班ごとにバーベキューを楽しんだ。手際の良い班と悪い班の差はあったものの、それぞれ充実した時間を過ごしたようであった。

⑨夜を楽しむプログラム（所要時間：120分、担当：学生スタッフ）

夜ならではの暗闇を活かし、生活班ごとのチームワークを高めるために行われるプログラムである。また学生スタッフが企画・運営し、参加者と学生スタッフの関係性を高めるプログラムでもある。暗闇は参加者たちの心理的な距離を近づけるようで、歌やおどろき、ゲームなどを楽しむ過程で、より強く絆を結んでいるようであった。後述するが、障がい学生はこのプログラムで、自身の大きな成長を感じることができる体験をしたようである。暗闇で行う輪投げゲームにおいて、何回投げても入らない障がい学生に対して、同じチームのメンバーのみならず他のチームからも声援がおくられ、最後までやり遂げることができた。何気ないプログラムの一場面ではあるが、障がい学生にとっては最後まであきらめない強い気持ちの大切さや仲間の存在のありがたさが実感できた瞬間であったようである。

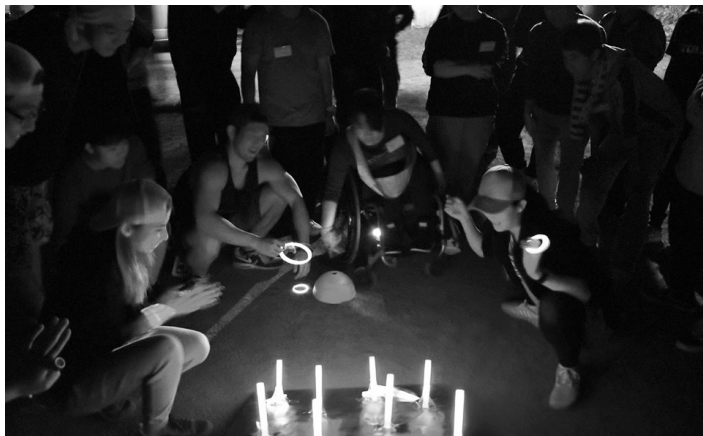


図10「夜を楽しむプログラムの様子」

⑩あかぎアドベンチャープログラム（所要時間：150分、担当：外部講師）

前日の雨天によりプログラムを変更し、薄曇りの中プログラムは実施された。変更したことにより、当初の予定通りの内容で実施することができた。「あかぎアドベンチャープログラム」は、プロジェクトアドベンチャーと呼ばれるアメリカで開発された体験学習法をベースにした教育プログラムで、人間関係で最も大切な“人を信頼する心”や成長のために必要な“自分自身を見つめ直す”ということが体感できるプログラムである。本会場にはその専用の施設が常設されており、専門のスタッフにより講習が行われた。参加者たちは、最初は仲間で協力することに戸惑っているようであったが、次第に声を掛け合い試行錯誤しながら、楽しく課題にチャレンジしているようであった。このプログラムを通して、より深くグループ内のつながりが確認できたようであった。残念ながら、障がい学生は本プログラムに参加することができず、見学及び応援という形で参加することとなった。



図11「あかぎアドベンチャープログラムの様子」

⑪水を楽しむプログラム～カッター体験～（所要時間：120分、担当：外部講師）

会場から40分ほど離れた前橋市立赤城少年自然の家に移動し、常設プログラムとして用意されているカッターを体験した。カッターとは大型の手漕ぎボートのことで、10人から20人程度の集団が全員で動作を合わせてオールを漕がないとうまく進まないことから、学校や海洋少年団などのボート訓練などに使われるプログラムである。参加者は最初、オールの使い方に戸惑っていたが、次第にコツがつかめてくと自然に声が出てきてうまく漕げるようになり、徐々にスピードが上がるとともに集団の一体感を感じられたようであった。



図12「カッター体験の様子」

⑫キャンプファイヤー（所要時間：90分、担当：全スタッフ・教員）

最後の夜を彩るプログラムであったが、あいにくかなり強い雨が降り、全体の時間を短縮して実施した。全体で3部構成になっており、第1部は井桁を囲んだキャンプファイヤーであり、大きな炎を囲んで交流を楽しんだり炎を見つめてこれまでのプログラムを振り返る時間であった。また前日に作成したアロマキャンドルをこの場面で点火した。第2部はトーチトワリングであり、学生スタッフが本実習の準備の合間に練習したトーチ（松明）を回しながら行う演技を披露する時間である。なお参加者からも4名を指名し、この場で披露している。第3部は火文字とファイヤーロードであり、学生スタッフが炎により浮かび上がるメッセージを参加者に伝える時間である。本年度のテーマは“糸（いと）”であった。これらのプログラムは幻想的な雰囲気の中で行われ、参加者にとって印象深い時間となったと思われる。



図13「第1部 キャンプファイヤーの様子」

(3) 障がい学生への配慮

障がい学生が本実習に参加するにあたり①人的配慮、②空間的配慮、③プログラム参加の配慮の3点を行った。①人的配慮は保護者の同行や専属の学生スタッフを配置すること、②空間的配慮はバリアフリー化された生活施設を手配することや移動用の乗用車を準備すること、③プログラム参加の配慮は食事や活動プログラムへの参加に際し、施設や担当講師、学生スタッフと連携し障がい学生が参加しやすい環境を整えることである。以下、それぞれの具体的配慮について記述する。

①人的配慮

1) 保護者の同行

大学における教育活動に保護者が同行することに賛否はあると思われるが、障がい学生の初めての野外活動に対する精神的不安を軽減することや、普段の生活においても入浴など一部の生活動作にサポートが必要なことから、保護者と相談し実習期間中の同行を依頼することとした。

2) 専属の学生スタッフの配置

4年生で介護福祉士の資格を持ち、福祉現場での実践経験を持つ学生を障がい学生専属の学生スタッフとして配置し、他の学生スタッフとは異なる役割として任にあたせた。障がい学生と学生スタッフは普段から親交があり、保護者とも面識があったことから、既存の信頼関係を基礎にした支援体制が構築できたものとする。

3) 教員の役割分担

本実習は専任の教員2名が担当した。1名は本実習のプログラム運営を中心に直接的に学生と関わる教員である。そしてもう一人の教員である筆者は本実習の総括責任者として担当し、施設との窓口や教員相互の連携・調整、そして役割の一部として障がい学生とその保護者との窓口として担当した。窓口を一本化することで、障がい学生や保護者の要望を受け取りやすくなったものとする。

②空間的配慮

1) 乗用車での移動

交流の家は、宿泊施設を含む研修施設はバリアフリー化されており、キャンプ場も比較的平坦なレイアウトになっているが、宿泊施設からキャンプ場までは位置的に離れているため、乗用車での移動が必要であった。また交流の家への行き帰りについては、大型観光バスへの乗降が困難なことや休憩時に障がい者の駐車スペースを利用しやすいことから、教員が運転する乗用車を準備することとした。

2) バリアフリー化された生活施設

実習施設として交流の家を確保した当初、障がい者も利用可能な一般の宿泊棟で、障がい者用の浴室に隣接した宿泊室が確保されていたが、交流の家の配慮により普段講師室として使用する宿泊施設の使用が許可された。このことは特に夜の時間、人目を気にすることなく生活でき、乗用車での移動も玄関先から直接乗降できるなどメリットが大きかった。

③プログラム参加の配慮

1) 食事

本実習での食事は、大きく野外炊飯と本館食堂での食事に分けられるが、どちらの場合も食材・料理は本館食堂に注文することになる。障がい学生には食物アレルギーがあることから、食堂指定の書式「食物アレルギー事前確認表」を提出し、口頭での相談を経て対応を依頼した。具体的には野外炊飯の場合、アレルギーに該当しない食材に変更することや調理の順番を工夫することによりアレルギーの影響が出ないように助言を受けた。本館食堂での食事の場合は、アレルギーに該当しない特別食を1品用意してもらい、その他は通常のバイキング料理の中で障がい学生本人が選択できるようにした。各バイキングの料理にはアレルギーの指定が明記されている。障がい学生は、自身のアレルギーについて自分自身で調整できることから、本館食堂の配慮を含めて食事面の不都合は全く無かったようである。

2) 活動プログラム

キャンプ場内で行われた活動プログラムは、段差がほとんどない中で行われたため、特に配慮することは無かったが、3日目「水を楽しむプログラム～カッター体験～」は特別な配慮が必要であった。栈橋の近くまでは車椅子で移動できるものの、栈橋は学生スタッフ一人で背負って移動し、乗船と下船の際は船外に2名、船内に2名の学生を配置して乗り降りのサポートを行った。操船の際は、座位の固定ができなかったので両脇を学生スタッフと教員がはさみ、互いの身体を押し付けることで座位の安定を図った。これらの取り組みにより、心配されたプログラムも無事参加することができた。

しかしながら、3日目「あかぎアドベンチャープログラム」だけは、専用施設がキャンプ場内の小道に点在していて車椅子での移動が難しいことや、プログラムの

性質上障がい者の利用が想定されていないことなどから参加することができず、できる限り見学することや仲間を応援することでプログラムに参加したとみなすこととした。これらの対応は、事前に障がい学生及び保護者には了承を得ていたものの、全員が参加できないプログラムを設定せざるを得なかったことは残念であった。

3. 方法

本実習の成果を（１）参加した学生からの評価、（２）障がい学生からの評価、（３）保護者からの評価の３点から検証する。（１）参加した学生からの評価は交流の家に向かうバスの車内と実習終了後の帰りのバスの車内においてアンケート調査を行った集計結果を基にする。（２）障がい学生からの評価は実習期間中に記入した「実習ふりかえりシート」に着目し、そこでのコメントを抽出する。また「実習レポート課題」も活用するものとする。（３）保護者からの評価は実習終了後に質問項目を設定し、アンケート形式で回答を得た。

（１）参加学生へのアンケート調査

①アンケートの調査項目

アンケートは全体で５部構成となっており、参加者本人の変化にも着目して調査した。第１部は参加動機や不安要素、実習プログラムに対する期待度（２回目は満足度）など４項目に関する質問を選択させた。第２部は障がい学生と一緒に参加することの印象を「１：すごく不安」から「５：とても期待している」の５件法で選択させた。第３部は実習中の心境の変化に関する１２項目の質問を「１：全く当てはまらない」から「５：とても当てはまる」の５件法で選択させた。内容は学生自身のコミュニケーション力、積極性、自己効力感、他者評価、社会貢献の意識、大学への所属感などである。第４部は実習全体の期待度（２回目は満足度）を０～１００の数値で記入させた。第５部は実習に臨む心境（２回目は実習を終えての感想）を自由記述させた。

②対象者

本実習を履修し、障がい学生本人を除いた１６名（男性１２名、女性４名）に対してアンケート調査を実施した。

（２）障がい学生のコメント抽出

実習日の夜に実習ふりかえりシートを記入し、３日目の夜までのシート３枚を集計する。設問項目は「１．体験したプログラムの感想」「２．他者とのかわりで印象に残ったこと」「３．自分自身の変化について」「４．本日の印象に残った“良かった”エピソード」の４点である。

また、本実習のレポート課題からもコメントを抽出することとした。

(3) 保護者へのアンケート調査

実習終了の直後、以下の10点について質問項目を設定し、後日回答いただいたコメントを評価とした。

- ①（保護者として）本実習にどのような期待をしていたか？
- ②（保護者として）本実習にどのような不安があったか？
- ③生活面（寝室やトイレ、お風呂等）で不便な点はあったか？
- ④食事の面で不便な点はあったか？
- ⑤お子さんがプログラムに参加する様子を見ての率直な感想
- ⑥お子さんが他の学生やスタッフ、教員と交流している様子を見ての率直な感想
- ⑦実習期間中にお子さんが見せた意外な行動や態度
- ⑧（保護者として）実習期間中に印象に残ったエピソード
- ⑨本実習全体を通しての率直な感想
- ⑩実習が終了してお子さんに何らかの変化は見られたか？

4. 結果と考察

(1) 参加した学生からの評価

①実習前の不安と実習に参加して良かったこと

アンケート調査は、本実習に出発する時と終えた時に、参加学生に対して回答させた。実習に参加するに当たって不安なことを答える項目では、「実習の雰囲気になじめるか」が5名と最も多い回答が集まった。また、「キャンプ場の気候」に不安を感じていた学生が4名となっており回答が多かった。このように、実習参加前では、参加学生の全体的な雰囲気や、実習が行われる自然環境などに不安を抱えていることが明らかになった。その他、「怪我するのではないか」「実習内容の把握」「テントは快適か」「食事はおいしいか」「友達と仲良く過ごせるか」などの項目はそれぞれ0～2名の回答であり、比較的不安と回答する者が少ない項目となった。

実習前のアンケートに対し実習後では、実習に参加して良かったことを回答させた。その結果、「楽しい体験ができた」「実習の雰囲気が良かった」「友達と仲良く過ごせた」「スタッフが良い人たちだった」という項目にそれぞれ10～14名の回答が集まった。実習前には実習の雰囲気に不安を感じる学生が比較的多かったが、実習後にはその不安が解消され実習の雰囲気が良かったと感じ取り、様々なプログラムを通して友達と関わることができたと評価する学生が多かった。

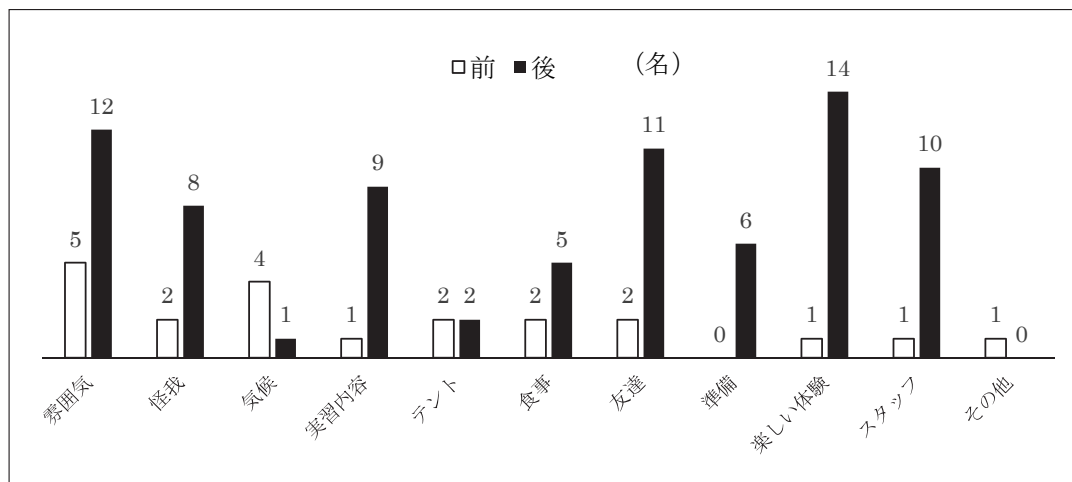


図14 実習前の不安と実習に参加して良かったこと

②障がい学生が参加する実習に対する印象について

障がい学生が参加する本実習の印象について、実習前には不安と期待に関する項目、実習後には困惑したか有意義だったか参加学生に回答させた。その結果、実習前は不安に感じている学生が1名、どちらでもない学生が10名、期待している学生が5名という結果になった。そして実習後は困惑した学生が4名、どちらでもない学生が6名、有意義だった学生が4名という結果になった。

実習前と比べて大きく変化があったこととして、どちらでもないと回答する学生が少なくなったことが挙げられる。本実習に参加する前は全くイメージできなかったことが、同じ班でプログラムを実施する中で障がい学生と関わり、実習前にイメージがつかなくなったことが明確になったのではないだろうか。しかし、どちらでもないと回答する学生が6名いるのは、今回の実習の班構成とプログラム実施形態が影響しているのではないか。今回の実習では実習生を3つの班に分け、基本的にその班で様々なプログラムを体験する場面が多かった。つまり、障がい学生が所属する班では関わる機会が多かったのに対し、障がい学生が所属していなかった班では関わる機会が少なく、実習が終わった後でもあまりイメージが明確にならなかったのではないか。

そしてもう1点変化があったことは、実習後に障がい学生と一緒に参加したことについて「困惑した」と回答する学生が、実習前より多くなったことが挙げられる。この結果は実習に参加する学生に対して、障がい学生の実習に対する希望や考え方、本人との関わり方などの情報を伝え切れなかったことが原因だと考えられる。実習に参加する学生は福祉を学ぶ学生であったが、障がい者を有する者と密に関わる機会が1年生の段階ではまだ少ない学生が多かった。このことはアンケート項目として回答させていないので、客観的に述べることはできないが、実習よりも前に参加学生に対して話を聞いていく中で分かったことである。今回本実習を行うに当たって、障がい学生が参加することは他

の参加学生に周知していたが、障がい学生の実習に対する希望や考え方、関わり方などを詳しく参加学生に伝える機会が少なかった。そのため、実習に参加して初めて障がい学生と深く関わる場面が生じ、困惑に繋がった可能性が考えられる。今後の課題として障がい学生が実習に参加する場合は、障がい学生の考え方や実習に対する希望、関わり方などを本人の了承のもと、他の学生に伝えることでお互いの距離を近づけることに繋がるのではないだろうか。

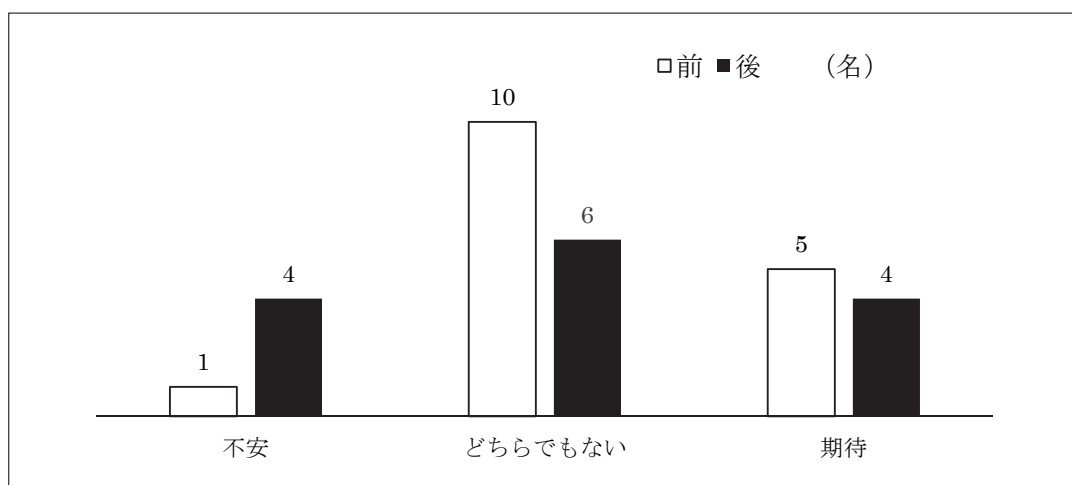


図15 障がい学生が参加する実習に対する印象の変化

③実習前後の学生の心境の変化と満足度について

実習前後の参加学生の心境の変化について図16に示した。「実習に積極的に取り組めた」「実習は有意義に過ごせた」「参加する仲間との一体感を感じた」「この大学の学生で良かった」「多少困難なことでもやり遂げられると思う」「実習に参加して良かった」などの項目で実習前よりも高い値となった。また、実習前には期待度として100%を最高としてどれくらい期待しているかを回答させ、71.9%であった。それに対し、実習後の満足度では96.4%という結果となった（図17参照）。

以上のように、本実習に対する学生の評価は実習前と比べて高い得点となり、参加学生に対してキャンプの専門的な支援技術だけでなく、仲間としての一体感を高め、本学の学生で良かったと実感してもらえるような結果となった。

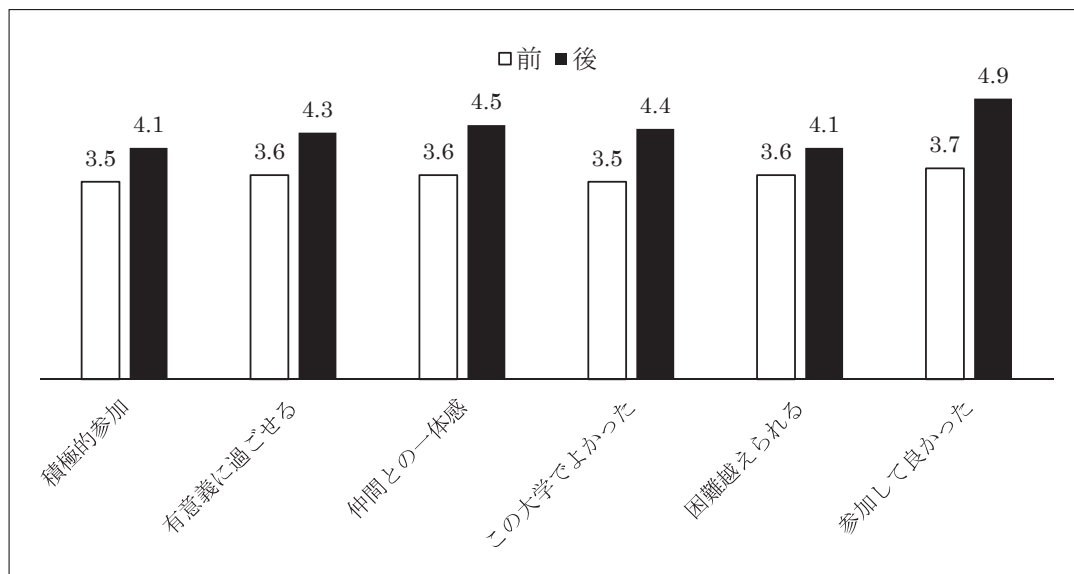


図16 実習前後の学生の心境の変化

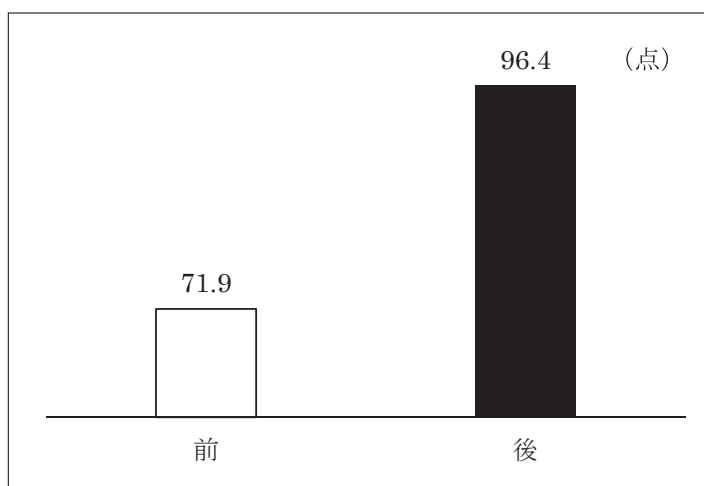


図17 実習の期待度と満足度について

(2) 障がい学生からの評価

〈ふりかえりシートのコメント〉

①友達もしくはスタッフや先生とのかかわりの中で印象に残ったこと

1日目：普段あまり関わりのない友達やスタッフさんがフレンドリーに声をかけてくれたおかげで楽しく1日目から参加することができ嬉しかった

2日目：戸惑うこともなく仲間の和に溶け込むことができたので良かった

3日目：戸惑いが無くなってスタッフさんや先生方と笑いながら話ができ、とても楽しかった

②自分で感じた“自分自身の変化”について

1日目：自ら進んで行動ができるようになった

2日目：「難しそう」と思ったプログラムにも、最初から最後まで諦めずに逃げ出さないで、何事にも前向きに取り組むことができ、楽しかった

3日目：自分から行動することができ、良かった

③今日一日過ごしてみて“良かったこと”をひとつ挙げてみる

1日目：仲間で協力し、意見を出し合いながら作業ができた

2日目：自分から行動し、分からないことは遠慮せず聞くことができ、何事にも諦めず逃げ出さないで取り組めた

3日目：スタッフさんや先生方とともに、私たち仲間とひとつの行事を作りあげられたことが楽しかったと同時に、感動した

〈レポート課題からのコメント〉

①自分自身の思わぬ発見

「輪投げ」に取り組んだ際、時間がかかってしまい何度もやり直しをしたが、諦めず逃げ出すことなく心が折れず、最後まで参加することができていたことは、自分の心が強くなったと実感しました。

②友人・スタッフに対する発見

1日目夕食の野外炊飯の時に、私自身不便であることが当たり前だと感じていましたが、同じ班のメンバーが1日目の反省会の時に指摘してくれ、やはり不便だったという事実改めて気づかされました。自分から相手の気持ちに気づき、不便なこと、やってほしい事を自分から発信していかないと周囲の方は分からないと思いました。何事も遠慮しないで発信することが大切で、それが無いと作業工程が遅くなってしまうことになるので、迷惑になるのを防ぐためにも心掛けようと思いました。

③友人・スタッフに対する嬉しかったこと

先生方や先輩方、そして同級生の仲間が「どういう風に介助や補助をしてあげれば参加できるか」を常に考えながら行動してくださったことが嬉しかったです。

④実習を振り返っての感想

2年生の学生スタッフが計画や準備、そして当日の運営で中心となり、3、4年生と私達1年生は、サポートしながら楽しむ立場で一致団結して一緒に今回の実習のテーマである「糸」を感じることができました。このような実習を体験することできて幸せで、最高の時間でした。

【考察】

障がい学生は本実習を通して、先生や先輩への感謝や仲間との強い絆を感じたと同時に、自身が不便に感じていることについて発信することにより、事態が改善することやグループの作業効率が高まることを実感できたようである。また「輪投げ」の体験を例にとれば、ひ

とつのことを最後までやり遂げる自信を持てたことは、今後の生活に大きな影響を与えたものと思われる。

これらのことは、横山らが報告した「いきいきキャンプの子ども達－障害のある子のための野外活動のすすめ」にも記述されており、野外活動は①感動と達成感を与える、②生活技能を高める、③人間関係能力を高める、④自主性・社会性を高める、の4点を紹介している。^[6]

本実習が、障がい学生の社会的自立に向けて必要でありかつ具体的なスキルが習得でき、そのことを自身も実感できる機会になったのではないかと推察する。

(3) 保護者からの評価

①保護者としての期待

事前準備をかなり念入りにしていただいたとのことだったので、子どもがどのように参加できるのか、とても楽しみにしていました。

②不安点

子どもの体調面です。以前からイベントの前日や当日の朝にお腹を壊すことが多く、今回もやはり同様だったので、実習中にお腹を壊し続けられないか、つねに不安がありました。アレルギー面については事前に丁寧に打ち合わせていただいていたので、不安はなく過ごせました。

③生活面での不便

全ての人にあてはまるのではなく、うちの場合ということになりますが、トイレと風呂の問題は必ずついてまわります。これは今回だけではないですが、身障者用トイレにはベッドがないことが多く、子どものように時々ベッドが必要な人には使いづらいので、うちはどこかに泊まりに行く場合、トイレの床に敷けるようなシートを持参しています。

また、風呂場では風呂マットがないので、代わりになるようなジョイントマットを必ず持参しています。これは施設側に配慮していただくということではなく、今後も私たちが持参するので大丈夫です。

④食事面で不便なこと

通常、食事面で不便なことは、配膳と車椅子の入るテーブルです。(子どもの場合、自分での配膳は難しい状態です。またテーブルですが、足が入らず、膝がぶつかってしまうテーブルがあります。そうすると前のめりで食事をしなければならず、腰が痛くなるようです。)

しかし今回配膳は、周りの方々のご配慮やご協力で、不便な思いをすることなく過ごせたようです。また、机の高さもちょうどよく、姿勢を崩すことなく食事ができました。

⑤プログラム参加の様子を見て

最初こそぎこちない様子で活動していましたが、徐々にリラックスし、周りのスタッフの方々や同級生の手助けや声かけもあって、とても楽しく参加できていたように思います。

⑥他学生、スタッフ、先生方との交流の感想

子どもはみなさんと仲良くなりたいと思っていたので、周りの方々が積極的に話しかけてくださり、とても嬉しそうでした。また子どもの作業中、作業しやすいようにサポートしてくださったり、困っていた時に気遣っていただいたり、とても助かりました。

⑦実習期間中の意外な行動

意外な行動というよりは、成長を感じたエピソードがありました。

夜のレクの時に、輪投げがなかなか入らず、何十回も1人でやっていました。今まで子どもですと、途中でくじけて、やるのをやめてしまったり、涙ぐんだりしていたのですが、みなさんの応援をいただき、最後までやりきることができました。あとでこっそり、「大丈夫だった？泣きそうにならなかった？」と聞いてみたのですが、自信満々で「泣かなかった。応援で勇気が出た！」と言っていました。

⑧印象に残ったエピソード

初日のカレー作りの時に、子どもは野菜を切る係だったのですが、調理台の下部分に棚が一段あったため足が入らず、苦戦しつつも野菜を切っていました。それに向かい側で同じく野菜を切っていた他学生が気づき、その日の反省点で「足が入るテーブルがあればよかった。」など、意見を言ってくれました。こういった不便なことはどこにでもあることで、子ども自身も「不便なのは当たり前」と思っていたので、今回の件で他学生に気づいてもらえたことに驚き、喜んでいました。

とはいえ、私たち家族も「何がなんでもバリアフリー対応してほしい。」という考えを持っているわけではなく、不便なことはいろいろと今後もあると思うので、その場で臨機応変に対処できることがベストであると思っています。

⑨実習を通して感想

車椅子の学生が、キャンプ実習に参加するということで、関係者の皆様は、大変ご苦労されたことと思います。できることできないこと、加えてアレルギーなど、配慮すべき点が多くあり、つねに不安がつきまとう状態だったのではないのでしょうか。

企画をされたスタッフの方々は子どもを、「廊下ですれ違った」「殆ど見かけない」あるいは「遠くで見ただけ」という方も多かったのではないかと思います。そんなよく知らない、まして車椅子に乗って生活している人が、キャンプで一緒に楽しめる企画を考えることは容易ではなかったと思います。おかげさまで、連日とても楽しく過ごすことができ、良い思い出がたくさんできました。

子どもはその日にあったことをすべて話すタイプなのですが、キャンプ実習中、「こういうことがあった。楽しかった！」「こう言ってくれたんだよ！嬉しかった！」と、連日目を輝かせながら話してくれました。

先生方をはじめ、スタッフの皆様には大変お世話になりました。たくさんの配慮をいただき、とても感謝しています。

⑩実習後の娘の変化

いろいろなことに自分で立ち向かう勇気が出たように思います。今までだと少し躊躇してしまうことでも、「私はやるよ。」と積極的な部分が見えてきました。

【考察】

本実習に同行いただいた保護者からも、肯定的なコメントが多数寄せられた。これらの背景にあるのは、事前に本実習のプログラム内容やサポート体制を十分伝えることができたことと、実習当日のサポート体制がうまく機能したことによると思われる。障がい学生の体調面を除き、参加にあたって不安に感じるものがなかった点や、安心してプログラムに参加する障がい学生の姿を見ていただけたことは、保護者との信頼関係を築く一助になったのではないかと考える。

芝原らの報告では、障がい者を抱える家族はできる限りスポーツ活動に参加させたいと考えている一方で、身体的負担やケガ等のリスク管理に不安があることを示唆している。^[7] 本実習では、保護者としてこれらの不安が軽減され、間近で障がい学生のいきいきした表情や困難に立ち向かい乗り越えた力強い姿を目の当たりにできたことは、本実習の効果を実感された瞬間であったのではないだろうか。

5. まとめ

障がい学生が参加する本実習を事故や病気、途中離脱者を出すことなく終了できたことを通じて一定の成果を得ることができたと考ええる。

その1点目は障がい学生への配慮事項を明示できたことである。これらの事項が全てであるとは思わないが、①人的配慮（保護者の同行、専属の学生スタッフの配置、教員の役割分担）、②空間的配慮（乗用車での移動、バリアフリー化された生活施設）、③プログラム参加の配慮（食事、活動プログラム）が効果的に機能したことが、成果を上げた一因であろう。

2点目は障がい学生が高い満足度を得られた点である。全てが初めての体験であるにも関わらず、仲間やスタッフとの繋がりの中で、自身が前向きに取り組んだからこそ、困難に打ち勝つ体験や自身の成長を実感することができたのだと思われる。これらのことは、障がい学生の社会的自立に向けても大きな成果と考えることができるのではないだろうか。

一方、課題があったことも否定できない。まず、事前に了承が得られていたとは言え、3日目の「あかぎアドベンチャープログラム」に障がい学生が参加できなかった点である。当該プログラムは、本実習の教育的意義や実施会場の特色あるプログラムを体験するという観点からは是非導入したいプログラムであったので、熟慮を重ねた結果実施することとした。この判断については、今後も検証が必要であると思われる。

そして、実習参加者が障がい学生と一緒に参加することの戸惑いを最後まで払拭できなかったことや、同じ班に所属しなかった参加学生は障がい学生との交流を十分体験させることができなかったことも大きな課題であると考ええる。これは教員としてのプログラム運営上

の配慮不足と言わざるを得ない。丁寧な事前指導がなされていれば、障がい学生と参加学生の双方のコミュニケーションはより円滑に促進されていたと思われる。

シュライエンらはその著書「障害者野外活動ハンドブックー安全な活動とインテグレーションの実現のために」の中で“インテグレーション（統合）”という考え方を紹介している。インテグレーションとは、障がいをもつ者ともたない者が、互いに「参加して良かった」と思えるような素晴らしい体験を得るようにするための、意図的なプロセスを指す。^[8]そしてインテグレーション・プログラムは次のような5点の機会を得るだろうとしている。

[9]

- ①大自然の中で障がいをもつ者ともたない者とが共同生活を行う
- ②自信、自尊心を高める
- ③障がい者が自立するために必要な生活技術を身につける
- ④障がい者が自分の障がいを客観的に眺め、否定的な観念を捨て去る
- ⑤障がいがあろうとなかろうと同一仲間なのだということについて理解を深める

まさに本学が実施するキャンプ実習は、これらの点を具現化することが求められている。今後も検討を重ね、この理想の姿に近づけるよう努力していきたい。



図18 全員で記念撮影

【引用文献】

- 〔1〕 社団法人日本キャンプ協会編、「キャンプ指導者入門」, p7, 2006年
- 〔2〕 中央教育審議会,「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」, p5-8, 2013年
- 〔3〕 独立行政法人日本学生支援機構学生生活部障害学生支援課,「平成28年度（2016年度）大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書」, p41, 2017年
- 〔4〕 片山昭義, 中島悠介,「障がいを持つ学生が実践できるキャンプ実習プログラムの試み」, 浦和論

叢Vol.57, p57-76, 2017年

- 〔5〕 浦和大学総合福祉学部, 2017SYLLABUS, p41, 2017年
- 〔6〕 横山正幸, 藤澤勝好, 「いきいきキャンプの子ども達－障害のある子のための野外活動のすすめ」, 学文社, p119-132, 2005年
- 〔7〕 芝原美由紀、八並光信、一場友実、斉藤利恵、塩之谷巧嘉, 「肢体不自由児の体育・スポーツ活動の現状と課題」, 第48回日本理学療法学会大会, 口頭発表0-B神経-174, 2013年
- 〔8〕 スチュアート・J・シュライエン, レオ・H・マカボイ, グレゴリー・J・レイス, ジョン・E・リンドース, (芳賀健治監訳), 『障害者野外活動ハンドブック－安全な活動とインテグレーションの実現のために』, [初版], 学苑社, p12, 1998年
- 〔9〕 スチュアート・J・シュライエン, レオ・H・マカボイ, グレゴリー・J・レイス, ジョン・E・リンドース, (芳賀健治監訳), 『障害者野外活動ハンドブック－安全な活動とインテグレーションの実現のために』, [初版], 学苑社, p16-17, 1998年

Summary

Outcomes and Issues of Camp Practice Programs that Disabled Students Can Perform

Akiyoshi Katayama, Yusuke Nakajima

When students using a wheelchair entered this university, we reviewed a venue for a camp practice implemented in this university and its programs. And we were able to confirm the following outcomes when we implemented it this summer. First of all, we were able to clearly specify the items to be considered for disabled students. Specifically, they are ①human considerations, ②spatial considerations and ③considerations on participating in the programs. And disabled students who participated were able to have a high degree of satisfaction because they were able to feel the experience to make it to the last even in a difficult situation and their own growth. On the other hand, the issues were also revealed, and the following points can be mentioned: that the programs in which disabled students could not participate were included and that we were unable to completely eliminate bewilderment among participating students because the considerations for exchange with participating students were not enough.

Keywords disabled students, camp practice, sports for the disabled,
field activity, inclusive society

(2017年11月16日受領)

